

耕種生産研究室のご紹介

業務用米の品種・たまねぎ直播栽培技術を開発

全農の耕種生産研究室は、種苗開発研究部（昭和53年設立）と商品開発研究部（昭和62年設立）を源流とし、その後いくつかの機構改革・名称変更を経て令和7年に発足しました。主な業務として、国産農産物の生産維持と加工・業務実需への安定供給のために、多収化・省力化・低コスト化を実現する生産技術と品種の研究・開発に取り組んでいます。

水稲

需要と環境変動に応じた品種の開発

水稲では、主に米の消費動向や気候変動に対応した業務用米の品種開発などに取り組んでいます。近年、生活習慣の変化により中食・外食の割合が増加し、こうした消費・実需ニーズに合った品種の開発・供給が必要となっており、総じて業務用米の需要比率が増加しています。また、担い手の減少などによって一経営体当たりの作付面積が増加しており、各地域の主要品種と作期を分散できる品種がこれまで以上に求められています。

全農では、農研機構と共同で新品種の開発に取り組んでいます。農研機構が交配した有望系統を全農が生産者、実需者ニーズの観点から選抜するという分担により開発を進めており、当室でも、生産力検定試験をはじめとした各種試験を行っています。令和5年度には早生の業務用多収品種「ZR1」が、令和7年度には中生の業務用多

収品種「ZR2」がデビューしました。開発した品種については、多収を達成するための適切な栽培方法を検証する栽培試験も行っています。

たまねぎ

生産維持・拡大に向けた栽培技術の開発

露地野菜では、主に省力化・生産コスト低減を目的とした栽培技術の開発や品種選定に取り組んでいます。たまねぎは、輸入量が生鮮野菜のなかで最も多く、重量ベースでの国内生産量ではキャベツに次いで2番目に多い、非常に需要の大きな品目です。しかし、個人経営体数が減少している昨今は生産の維持が急務となっており、当室では農研機構と連携し省力・低コストなたまねぎ直播栽培技術を開発しました。直播栽培の利点は、移植に比べ作業時間やコストが削減されるほか、球肥大につながる場合がある点が挙げられます。直播栽培の導入にあたっては、①適切な播種時期の選択②出芽・苗立ちの確保③害虫・雑草の防除が特に重要となります。

当室では、たまねぎ直播栽培技術の普及に向け、現地を含めた検証・実証試験を行い、たまねぎの生産維持・拡大をめざしています。また、現地に適した品種の選定や技術の他品目への展開などにも取り組んでいます。

【全農 営農・技術センター 耕種生産研究室】



中食・外食向けの多収米品種の開発



「たまねぎ直播機」を用いた播種